

必須業務実績報告書

介入開始年月日	西暦 年 月 日	介入終了年月日	西暦 年 月 日
提出分類 (○で囲む)	1. 新規提出 2. 再提出 (再提出時番号がある場合は右に記載:)		
介入終了年月日 が該当する認定 の年数とこの報 告がその年の何 報目か	(以下は新規提出時のみ記入。該当年を○で囲み、その年の何報目かを記載) 1年目: 報目 2年目: 報目 3年目: 報目		
表題 (再提出の場合、 当初の表題と同じ 表題を記載)	ステロイドを含めた服薬指導により、ノンアドヒアランスを回避できた一例		

記載上の注意: 10.5pt の文字で記載のこと。本文のみで1,000文字以上、かつ2枚に収めること (両面印刷はしないこと)。

提出の際には、必ず「小児薬物療法認定薬剤師 受講単位請求書」(様式10-6) および切手を貼付した返信用封筒と共に提出のこと。

1. 対象患者背景

【年齢】 0歳4カ月 【性別】 女児 【体重】 6kg

【処方薬 (医薬品名・用法・用量)】 キンダベート軟膏 25g+白色ワセリン 25g を混合 1日2回入浴後塗布

【処方薬の評価】 キンダベート軟膏はアトピー性皮膚炎 (乳幼児湿疹を含む) の効能¹⁾とされ、日本でのステロイドランクの選択では5段階分類となっており Medium(IV群)に該当し軽症における第一選択²⁾に含まれている。また、白色ワセリンは調剤用の軟膏基剤又は皮膚保護剤³⁾ (保湿剤) として用いるとあり、処方としては問題ない。

【介入前の治療経過】 患児は4か月齢であり、母乳と人工乳を半分ずつの割合で使用。1週間ほど前より全身に湿疹が出現し、ぐずることも増えたため近医の小児科を受診。医師より乳児性湿疹と診断され、1日2回入浴と、キンダベート軟膏 25g と白色ワセリン 25g ずつの混合軟膏を、1日2回入浴後に全身に塗布するよう指示された。

調剤した薬をお渡しする際、患児の母親から「医師に『当院ではステロイドを使用しません』と言われ、ステロイドが何か分からずに処方せんをもらってきたが、帰宅後、インターネットでステロイドについて調べたら、背が伸びないとか、骨が弱くなるとか、皮膚が黒くなるとか、一生止められないなどという怖いことが載っており、自分の母親に相談したら、ステロイドは怖いので使わない方がいいと言われた。今回の薬はステロイドだと思うが、使ってもいいものなのか」という質問があった。

2. 具体的な薬学的介入内容

【薬学的介入をすべきと考えた理由 (問題点など)】

患児の母親と祖母が、ステロイドの使用に対して不安があり、きちんと使用しない可能性が考えられた。

痒みによると思われる睡眠障害もみられるため、ステロイド外用薬の使用に対しての抵抗感を除き、きちんと使用することで治療効果を上げる必要があると考えた。

【薬学的介入開始後の経過 (臨床値推移や指導内容等)】

患児の母親に、現在の湿疹治療では炎症の程度に応じたステロイド外用薬の使用が一般的であること、背が伸びない骨が弱くなるなどの影響は、ステロイド外用薬ではなくステロイド内服薬で見られる副作用であることを伝え、ステロイド外用薬使用に対する不安感や抵抗感がなくなるよう指導した。

また、赤みが消えても自己判断でステロイド外用薬の使用を中止せず、医師に指示された回数の塗布をすることで再発抑制となることや医師の診察の結果でステロイドの使用量が減る可能性もあることなどを伝えた。

湿疹発現と同時期にぐずることも増えたとの事で、きちんと治療を行わないと、痒みが睡眠障害や不機嫌の原因となり、睡眠障害が成長抑制につながる可能性についても伝えた。

【薬学的介入後の効果】

指導後、患児の母親はステロイドの使用について納得され、医師の指示通り入浴と軟膏塗布を行った。

その後、全身の赤みもとれ、ゆっくり眠れるようになってきたとのことだった。

現在、ステロイドは中止となり、ワセリンでのスキンケアのみとなっている。

3. この事例に関する考察

【処方薬の科学的根拠に基づいた評価】

アトピー性皮膚炎診療ガイドライン 2018³⁾によると、小児におけるステロイド外用薬に際しての注意点として、薬物療法の中心は抗炎症療法であり、その中心はステロイド外用薬であること、小児では年齢ごとに使用法を分けており、それは小児では副作用が出やすい点によるが、それを恐れて過少投与になって症状がかえって遷延化しないように注意が必要、との記載がある。また小児での注意点として、1) 保護者自身が無責任な周囲の言葉に傷ついたり悩んだりしていることが多いことを念頭に入れて説明にあたる。3) その心配の理由の1つは使用量がわからないことによる。FTU (Finger Tip Unit) 法などで具体的に示すことが保護者の安心につながる。4) 全身投与ではなく局所投与であること、永久に使用を続けなければならないのではないこと、むしろ過少投与で漫然と使い続けることで効果も不確実となること、症状が軽微になれば保湿剤のみによるスキンケアに変更できることなども説明することが保護者に安心感を与える、との記載がある。

ステロイド内服薬の副作用をステロイド外用薬の副作用と誤解している場合も多く、ステロイド外用薬の使用に対する抵抗は現在でも根強くある。したがって患児の薬剤使用のキーパーソンとなる保護者が抱えている抵抗感や不安の払拭は治療効果に対する大きな鍵となる。今回は乳児性湿疹に対するステロイド外用薬使用であったが、薬剤や治療法の正しい知識を母親に指導することで、治療効果を発揮するのに寄与することができ、保湿剤のみでのコントロールが可能となった。今後も経過観察を行いながら指導していく必要がある。

【参考文献 (添付文書含む)】 (インターネットの場合はそのサイト名を必ず記載のこと)

- 1) キンダベート軟膏 0.05% 添付文書 2019年2月改訂
- 2) 白色ワセリン 添付文書 2015年4月改訂
- 3) 片山一朗ほか監修：アトピー性皮膚炎診療ガイドライン 2018 - 日本皮膚科学会
https://www.dermatol.or.jp/uploads/uploads/files/guideline/atopic_gl1221.pdf